

世界の著名な特許にみる ————— 第28回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その2 生誕から少年期まで

山口県岩国市の偉人「藤岡市助」

特別編 長州藩と岩国藩の歴史：毛利家と吉川家

長州藩を救った岩国藩主 吉川経幹

吉田松陰と門弟

岩国藩校「養老館」、「岩国学校」、「岩国英語学校」



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

今号は、藤岡市助の生誕から少年期についてお送りします。藤岡市助が生まれたのは、現在の山口県岩国市です。幕末の山口は、激動の状況にありました。

藤岡市助が生まれた安政4年(1857年)は、翌年にかけて、安政の大獄が起き、元長州藩で攘夷派の吉田松陰も処刑され、1863年には、攘夷派急先鋒の長州藩が、他藩に先駆けて外国船に無差別攻撃を開始する(下関事件)という、幕末の大激震地でもありました(表1参照)。

この後の紆余曲折を経て、成し遂げられた明治維新は、雄藩とよばれる薩摩藩(鹿児島)、長州藩(山口)、土佐藩(高知)、肥前

藩(佐賀)が中心となり、新政府を樹立していきます。

田中久重編では、肥前藩、久留米藩、薩摩藩について補足を入れましたが、藤岡市助編では、長州藩、岩国藩についての解説を特別編として設けることにします。

藤岡市助が、長州藩の中でも異端とされる岩国の地にて、岩国領主 吉川家の英断で創立された教育機関にて、岩国藩と長州藩を守り、西欧列強に日本が滅ぼされないよう、列強諸国の技術力に追いつかなければならない、という危機感と重責を受け止めながら、激動の時代の中、成長していく過程をみることができます。

藤岡市助

安政4年(1857年)～大正7年(1918年)



出典：工学博士藤岡市助伝、昭和8年

1. 生誕

藤岡市助は、ペリー来航（嘉永6年（1853年））の4年後にあたる安政4年（1857年）3月14日に、岩国領士族 藤岡喜介とウメの長男として生誕しました。

ちなみに、海の向こうの米国では、エジソン少年（10歳）が地下室に実験室を作っていました。（発明事業列伝第2回参照）

生誕地は、周防国（すおうこく）玖珂郡（くがぐん）岩国町大字錦見で、現在の山口県岩国市にあたります。

岩国市は、下記の図のように、山口県東部に位置し、広島県との県境に接しています。岩国市は2006年に錦川の下流域の旧市域と周辺市町村（岩国市、錦町、美川町、本郷村、美和町、周東町、玖珂町、由宇町）が合併して出来たもので、山口県内で山口市に次ぐ2番目に広い面積です。藤岡市助は岩国の偉人として、現在も郷土の方々から大切に敬われています。



出典：岩国市の紹介 岩国市シティプロモーション課

藤岡家は代々、岩国藩（領）の御蔵掛（おくらがかり）という、財政から行政一般を担う御蔵元に通う役人を務めていました。しかし弱小領であるので、藤岡家の家禄もわずか30石で、決して豊かとはいえませんでした。が、由緒ある家系（特別編 藤岡家の先祖参照）であり、幼年期から節制峻厳な士族の子弟としての教育を受けて育ちます。

領主 吉川家は人材教育に力を入れており、幕末の思想家である横井小楠が「文武の盛んなること山陽第一」といわしめた土地にて、藤岡市助は5歳頃から当時の士族家庭と同様に唐詩選句読や大学中庸などの素読、習字を学び、さらに武士の心構えや礼儀作法など厳格な躰と教育がされました。慶応元年（1865年）、8歳になった藤岡市助は、岩国領の藩校「養老館」に入る準備のため、教習所に入学します。教習所では、8歳から12歳までの士分の男子に論語、孟子、易経、十八史略などの素読や、習字などが教えられました（コラム参照）。養老館に入学した藤岡市助は初代学頭になります。また養老館では、課外活動で数人ずつ集まり結社を組織し、連夜、順番に経書、論語、孟子、日本外史等の諸書を学び討論を交わすこともしていました。ここで藤岡市助は、後に電気事業と一緒に進める三吉正一らと凝道社という結社に属していました。

領主の吉川経幹は月に何度か臨校しては自ら生徒を指名し、講義や討論を行っており、有能な人材を育て見極めていたと思われます。